



四君子文炬燵用塗火鉢



獅子文炬燵用文塗火鉢



透彫花蝶文達磨形煉炭火鉢



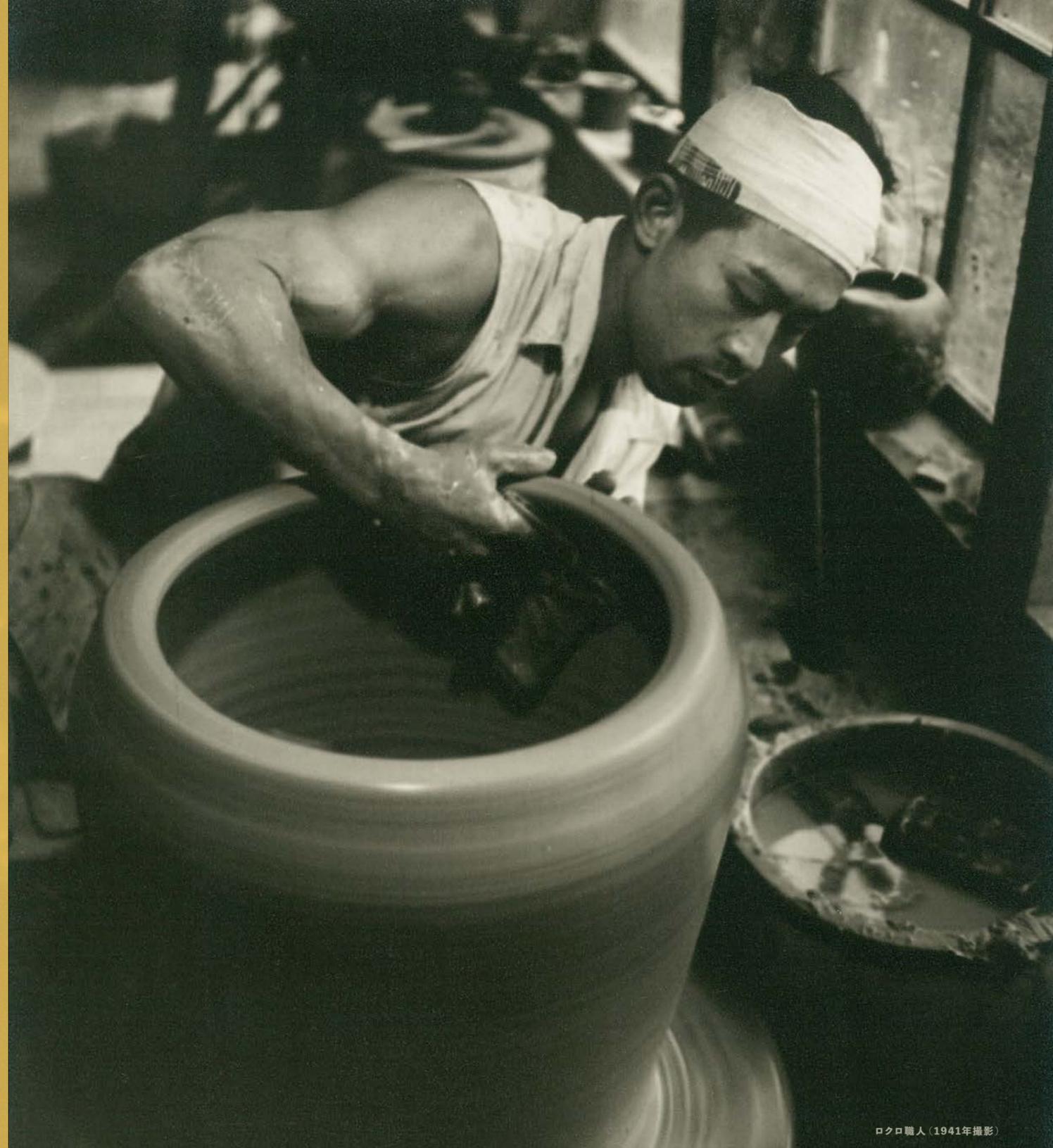
透彫梅花文達磨形塗煉炭火鉢



煉炭ストーブ



海鼠釉椅子用火鉢



ロクロ職人 (1941年撮影)

とこなめ陶の森 資料館 企画展

# 常滑の暖房具

# 常滑の暖房具

炭を灰に埋めて持ち運んで暖を取る「暖房具」は、少なくとも奈良時代までさかのぼるといわれています。この容器は、火鉢、火桶、炭櫃、瓶掛、手炉、手あぶりなど、用途や形状によって様々な名称があります。

常滑で生産された暖房具は、江戸時代に入ってからつくられるようになりました。しかし、当時のやきものは、赤物と呼ばれる素焼きの土器に近いものや瓦質の鉢が一般的で、炭火を運ぶ際に使用する道具に似ています。みなさんのイメージする常滑焼の火鉢が生産されるようになったのは、明治時代以降のことです。大正時代になると、火鉢は常滑の主要生産品になるほど大量に生産されるようになりました。



朱泥牡丹刻火鉢

明治時代の火鉢は朱泥と真焼が中心でした。朱泥土は、急須の生産のために開発された原料です。安政元（1854）年、常滑の名工の一人である初代杉江寿門堂が創始したとされています。明治時代中頃になると、国外向けの輸出用陶器である「朱泥龍巻」が作られました。対して、国内向けには高級なやきものとして、「朱泥火鉢」が作られるようになりました。肌理の細かい朱泥土は、彫刻を施すのにも適しており、肉厚の火鉢は格好のキャンバスでもありました。そのため、印刀を使用して文字や花鳥、風景画などが彫られた朱泥火鉢は、高級な陶芸品として高い地位を得ました。真焼は、甕や壺と同じ山土が用いられています。ひもづくりでつくられたものが多く、中世から続く常滑の作陶技術が生かされています。

大正時代になると、新しい輸出品「陶漆器」が開発されました。陶漆器とは、素焼きした燻焼品の表面に漆や塗料を塗ったやきものです。大正5（1916）年、山本紋次郎が常滑で焼いた素地に名古屋で漆塗や蒔絵などを施して海外へ輸出しました。陶漆器の国内向け製品である「塗火鉢」は、朱泥火鉢とは異なり、大衆向けの火鉢として盛んに作られるようになりました。

昭和時代になると、塗火鉢は大きく飛躍しました。昭和3（1928）年、八木鎮（ルビは通称）、柴山小市、村越彦十の3名が炬燵兼用手火鉢の実用新案を出願し、「三徳火鉢」の名称で製品化されました。この火鉢は蓋付きですが、炭火が消えないように蓋や胴部に通気孔を開け、煙突状の



三徳火鉢



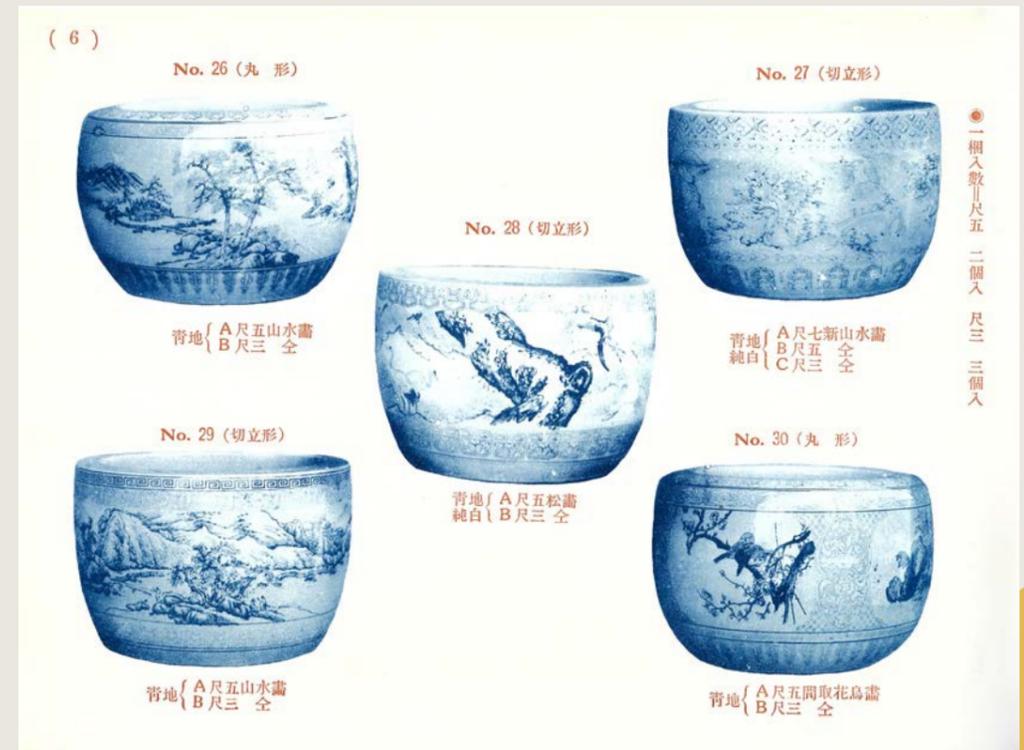
三徳火鉢の蓋裏

筒を付ける工夫がされています。そして、蓋が付いたことで、上から布団をかぶせても安全になり、手火鉢と炬燵の兼用が可能となりました。また、炬燵の中に火鉢を設置すると、まるでネコがいるように見えたことから「猫火鉢」という俗称も生まれました。

昭和戦前期になると、釉薬を施した火鉢が量産されるようになりました。染付火鉢は常滑でもつくられていますが、瀬戸のように磁器の原料がありませんでした。そのため、比較的安価な肌色の土に化粧掛けをおこない、その上に呉須絵具で山水画や文字を描き、透明の釉薬を掛ける技法が開発されました。これにより、大衆向けでありながら、高級感のある有田焼風火鉢が大量生産され、全国へ出荷されました。当時のカタログには様々な火鉢の写真が掲載されています。

戦後になると、家庭向けに練炭火鉢も開発されましたが、石油ストーブ、電気炬燵などの暖房具が急速に普及し、昭和40年代のカタログからも火鉢の姿が消えました。現在は、エアコンや床暖房が普及し、火鉢を使ったことのない世代が増えてきました。しかし、やきものから生まれるやさしい暖かさ、陶工たちの技術力やノスタルジックな魅力は今も健在です。

（とこなめ陶の森 おぐりやすひろ）



関豊吉商店 昭和十二年度新形火鉢カタログ



染付扇面文火鉢



テーブル形染付練炭火鉢



いろは文施釉火鉢



山水絵火鉢



網代文手火鉢



黒釉切立手火鉢



蚕火鉢 (アンポンタン)



筋引手火鉢



白泥藻掛手火鉢



真焼ふくべ手あぶり



植物文切立手火鉢



施釉手火鉢



施釉把手付手火鉢



白泥塩釉火鉢



瓦質火鉢



瓦質炬燵用火鉢



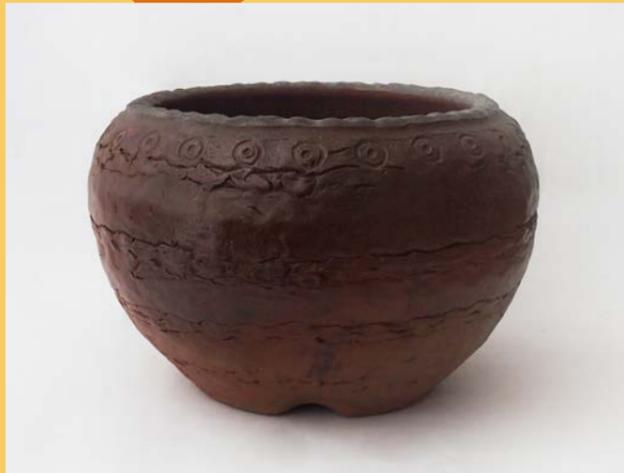
桐火鉢



独楽文手火鉢



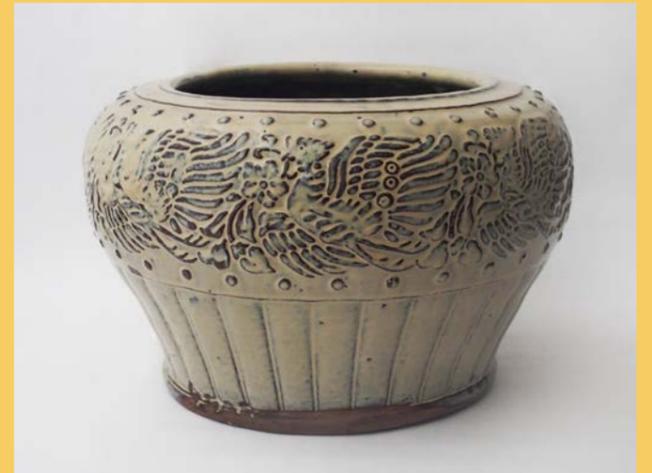
真焼手あぶり



真焼手捻火鉢



海鼠釉火鉢



施釉鳳凰文火鉢



朱泥細字刻火鉢



鶴松文塗手火鉢



雪花文色絵火鉢



海鼠釉六角火鉢